

作者は誰？

「浪華十詠」を詠んだのは、江戸時代の公卿たち。一人が一首ずつを詠んでいるため、二十名の公卿が関わっていることがわかります。公卿とは、公家のなかでもスーパーエリート、天皇の側近くに仕えた立場です。官職で言うと、摂政、関白に始まり、太政大臣、左右大臣、内大臣、大納言、中納言、左右近衛大将まで。位では、一位から三位までにあたります。色紙の署名をみていくと、**靈元院**（二六五四―七三二）周辺の公卿で宮廷歌人としても知られたメンバーであることがわかります。

靈元院は、後水尾天皇の第十九皇子にあたります。江戸幕府を第四代将軍・徳川家綱が執政していた時期に天皇として在位（二六六三―八七二）し、退位後に靈元院と名乗りました。

幼少より文芸の才能に恵まれた靈元院は、特に歌道に造詣が深く、生涯に詠んだ歌は六千首を超えるともいわれています。廷臣への和歌添削・歌学講義を行うなど、和歌活動の振興に力を注いだ人物で、院主催の歌合も数多く行われました。靈元院と宮廷歌人たちのコミュニティは「靈元院歌壇」と称され、ひとつの文化圏を形成していました。

浪華十詠の作者

では、二十人の詠み手を紹介していきます。

色紙には、「官職・冠位」＋「名前」というかたちで署名されています。

※本パネルでは、わかりやすいように、「官職・冠位」はゴシックで表示します。

亜槐退班實陰 <small>あかいたいはんさねかげ</small> 武者小路實陰 <small>むしやのこうじ さねかげ</small>	權中納言實岑 <small>ごんのちゅうなごんさねみね</small> 押小路實岑 <small>おしこうじ さねみね</small>
特進公福 <small>とくしんきんとみ</small> 三條西公福 <small>さんじょうにし きんとみ</small>	左羽林為村 <small>さうりんためむら</small> 冷泉為村 <small>れいぜい ためむら</small>
從二位藤原保光 <small>じゆにい ふじわらやすみつ</small> 高野保光 <small>たかの やすみつ</small>	右中将重瀨 <small>うちゅうじょうしげあき</small> 庭田重瀨 <small>にわた しげあき</small>
俊将 <small>としまさ</small> 坊城俊将 <small>ぼうじょう としまさ</small>	正二位重孝 <small>しょうにい しげたか</small> 庭田重孝 <small>にわた しげたか</small>
侍從實岳 <small>じじゅうさねおか</small> 武者小路實岳 <small>むしやのこうじ さねおか</small>	銀青光録大夫重季 <small>ぎんせいこうろくだい ふしげすえ</small> 高松重季 <small>たかまつ しげすえ</small>
正三位實積 <small>しょうさん みさねつみ</small> 風早實積 <small>かぜはや さねつみ</small>	八座佐金吾雅香 <small>はちざさこんご まさか</small> 飛鳥井雅香 <small>あすかい まさか</small>
尚書光綱 <small>しょうしょみつつな</small> 柳原光綱 <small>やなぎはら みつつな</small>	權中納言公野 <small>ごんのちゅうなごんきの</small> 武者小路公野 <small>むしやのこうじ きんの</small>
右中将房季 <small>うちゅうじょうふさすえ</small> 園池房季 <small>そのいけ ふさすえ</small>	特進光榮 <small>とくしんみつひで</small> 烏丸光榮 <small>からすまる みつひで</small>
從二位為範 <small>じゆにい ためののり</small> 五条為範 <small>ごじょう ためののり</small>	刑部卿兼武 <small>きょうぶきやうかみぶ</small> 萩原兼武 <small>はぎわら かみぶ</small>
從二位光和 <small>じゆにい いみつかず</small> 外山光和 <small>とやま みつかず</small>	蘭省兼胤 <small>らんしょうかみね</small> 広橋兼胤 <small>ひろはし かみね</small>